

3. 社会と労働

人間と人間との関係
物質代謝の社会的運営

今回のキーワード

- ⊕ 本能と自覚
- ⊕ 人間社会と動物集団
- ⊕ 協業・分業

今回の課題

- ✓ 人間社会の特質，および社会形成の発生地点を明らかにする。
- ✓ 物質代謝の社会的運営としての経済活動の基本的なカテゴリーを明らかにする。

今回の内容

1. 労働による社会形成
 - ① 協業
 - ② 分業
2. 社会の再生産

1. 労働による社会形成

社会的労働過程——協業と分業——

1.1 社会的協業

協業

- 協業 (Co-operation)
 - ⇒人間が他の人間と相互的に協力しあって労働するという事
- 個人の能力の限界
 - そもそも一人ではできない労働がある
 - 一人でやるよりも多数でやる方が効率的
- ↓ こうして
- 社会形成の必要性
 - = すなわち
- 物質代謝の社会的運営

注意！

- こんにちは、日本で「協業」と言うと、企業間での協力のことを言うことが多い。
- ↑ ↓ しかし、
- この講義で言っている「協業」とは、個人間での労働の協力のこと。
- ※企業間での協力が生じる時には必ずや個人間での労働の協力も生じるが、逆は真であるとは限らない。

例

例えば…

- 利益 (欲望)
 - 道を通るために、一人では動かせないような岩を動かしたい。
- 利益 (欲望) の一致
 - 同じ欲望を持つ人が他にいる。
- 協力
 - それならば、アカの他人であっても、協力しあって岩を動かすことができる。

労働の原理による社会形成

- 労働の原理、すなわち物質代謝の効率的運営、もっと簡単に言うと利益の一致に基づいて、社会関係を結ぶ。
- 自然を労働手段という媒介にする場合とは異なって、いまや媒介は、自分と同じく——しかし他者の——労働であり、ここに自覚的相互性が生じる。
 - 他者の労働は、自己の労働と同様に、主体的な行為であり、しかも自覚的な行為である。

相互性

- 互いが自己の利益を意識することができる。
- ↓
- 自己の利益の達成のためには他者の労働が必要であるということ互いが意識することができる。
- ↓
- 互いが自由に合意することができる。
- ↓
- 各人が相互的に承認し合って、動物集団とは異なる人間社会を自覚的に形成する。

労働の自覚性の社会的実現

- そもそも個人の労働は以下のような行為であった。
 1. 生産する前に結果を先取りし、
 2. 生産している間には自分の意志に従う。
- 先の例では、これを2人で行う。
 1. 実際に岩をどける前に、岩を南にどけるという結果と、そのために何をするかというイメージとを、共有し、
 2. 実際に岩をどける間には、個人の意志から独立した互いの共通意志 (=合意) に従っている。

自由の社会的実現(1)

- そもそも一般的原理（一般的必然性）は、
 - 利益が一致しており、しかもこの一致を互いに意識しているということ
- この一般的原理の観点からすると、以下は特殊的例外である。
 - 一方が他方を従属させたり
 - 一方が手抜きしたり
- この特殊的例外が常態的に生じるには、労働が社会形成する際に特定の歴史的な形態が必要である。

自由の社会的実現(2)

- 特定の歴史的な形態を前提しない限りでは、労働によって形成される社会関係は：
 1. 自由な関係である。
 - ∴ 利益の一致，目的の一致に基づいて，自由意志で結ぶから。
 - 互いに能力を伸ばすのが，互いの自由な発展こそが，互いにとって利益になる。
 - 人間は，自然に対する自分の自由をもた，社会の中で実現する。

平等の社会的実現

- 特定の歴史的な形態を前提しない限りでは、労働によって形成される社会関係は：
- 2. 平等な関係である。
 - ∴ 一方が自由，他方が不自由というのではなく，両者とも等しく自由なのだから。
 - 過程（＝労働）において，互いに共通の目的のための手段にし合っている。
 - 結果（＝生産物）において，互いに利益を得ている。

グローバルな関係(1)

- なるほど，この例はたった2人の社会であった。
 - しかも岩をどける前に形成され，岩をどけた瞬間に消滅する社会であった。
- ↓ しかし，
- この社会形成の原理は，友人・恋人 or 地縁・血縁のようなパーソナル or ローカルな原理ではない。

グローバルな関係(2)

- この社会形成の原理は，物質代謝の効率的運営，すなわち利益の一致という原理であった。
 - ∴ だからこそ，たった2人であっても地縁・血縁に関わりなく，アカの他人同士が協力しあうことができた。
- 利益の一致さえあれば，いくらでもこの社会関係はグローバルに拡大可能である。

グローバルな関係(3)

- その規模を決めるのは原理的に見て，ただプロジェクト（従って労働過程）の規模だけである。
- 例えば，
 - 岩をどけるだけならば，2人の協業で間に合ったが，
 - 1ヘクタールの田んぼの稲の収穫には多数の協業が必要だし，
 - 10ヘクタールの田んぼの稲の収穫にはもっと多数の協業が必要である。

1.2 社会的分業

最初に

- 協業で見たように、
そもそも種類の欲望を満たす場合で
さえ、個人の能力の限界が現れる。
- 多種類の欲望を満たす場合には、
なおさらである。

多様な欲求vs.限りある能力

- 個人の欲求は多様である。
⇕ しかし
- 現実の個人の労働能力は限られている。
↓ そこで
- 社会的分業によって、社会が解決

労働の個人的分割

- もともと個人の労働は、
有機的な全体でありながら、しかもなお、
いくらでも分割可能である。
= すなわち
- 他の動物の生命活動とは異なって、
人間の労働は、二重化した
(自分で自分を制御する) 活動だから、
自分の意志で任意にいくらでも分割する
ことができる。

労働の社会的分割

- 社会的分業労働 (Social Division of Labor: 労働の社会的分割)
⇒ 多様な欲求に応じて、
分割した具体的労働を各人に割り振り、
各人が役割分担すること
- 社会的分業の中で
個人的労働の変換が行われる。

先取り：後で論じます

現代社会では

- 市場社会では、
市場での商品交換を通じて
世界的規模の社会的分業が実現される。
【⇒『4.で』詳説】
- 資本主義社会では、
資本主義的営利企業の内部にも
分業が導入される。
【⇒『7.で』詳説】

試験範囲外

動物の役割分担

- 動物の役割分担の中で（進化の過程で）成功した（生き残った）ものは、しばしば運命的な形態をとる。
 - 例えば、女王バチと働きバチとの役割はすでに生まれた時から固定化されている。
- 人間の場合にも、経済活動への科学の応用以前には、分業は時にかなり固定化されてしまった。
 - 『7. イノベーションの構成要素』（後述）

参考

例

社会的分業の導入

- 異なる欲望，したがって異なる具体的労働，したがって異なる能力が問題なのだから，
- 異なる具体的労働を行う異なる人を集めてみよう。
- コストについては，1日5時間の労働を仮定しよう。

例

5人が集まって役割分担



パンを焼くのは得意なので私はパン焼きに特化する。

例

得意がなかったら？

- 別に釣りが得意でなくても，――
 1. 一日中，釣りばかりやっていたら少しは釣れるだろうし，
 2. 毎日，釣りばかりやっていたらやがては釣りが上手になるだろう。
 3. たとえ仮に向上心ゼロのボンクラだったとしても，分業によって効率化が達成されるだろう。
 - たとえば家と畑と海と山に行く移動時間は分業によって節約できるだろう。

例

社会的総生産物

- 社会全体で：
 - シャツ5着
 - 鳥10羽
 - パン5個
 - 魚20尾
 - 野菜5皿

例

生産物の分配

- 各人が：
 - シャツ1着
 - 鳥2羽
 - パン1個
 - 魚4尾
 - 野菜1皿
- （これ以外の分配ルールであってもいい）

例

生命活動の変換(1)

5人が行うのは量的に同じで質的に異なる具体的労働

A B 私 C D

例

生命活動の変換(2)

生産物の分配を通じて達成されるのは

労働の(生命活動の)変換

例

生命活動の変換

5人とも**1種類**の具体的労働しかしていないのに事実上、**5種類**の具体的労働を行ったということ

A B 私 C D

パン生産者の例

- 1種類の具体的労働しかしていないのに、5種類の具体的労働の成果を享受
- 変換の前後を通じて、5時間分の労働コストには変わりはない
- 社会というフィルターを通して労働の変換が行われた

生産力の上昇の主要要素

1. 労働力自身の向上
2. 労働手段の使用と向上
3. 社会関係の利用（協業・分業）

補足

- これらはすべて労働の媒介性の発展である。労働は自分の手段（=媒介）にする、——

1. 自分自身（=自分の人間的自然）を
 - （特に）労働力（=自分の能力）自身の向上
2. 自分の周りの自然（=対象的自然）を
 - 労働手段の使用と向上
3. 他の人間（=他者の人間的自然）を
 - 社会関係の利用（協業・分業）

先取り：後で論じます

『7. イノベーションの構成要素』
でもう一度考察する

1. 労働力自身の向上
 - 「企業内分業」では熟練労働
 - 「科学的知識の意識的・計画的適用」では知識労働（という複雑労働）
2. 労働手段
 - 「企業内分業」では道具の専門化
 - 「科学的知識の意識的・計画的適用」では機械設備
3. 社会関係（協業・分業）
 - 「企業内協業」として
 - 「企業内分業」として

2. 社会の再生産

生産関係

≡社会的生産における経済的な社会関係

- ▶労働様式（労働の社会的なやり方）によって規定される最も根本的な社会関係
- ▶その社会の性格を決める

先取り：後で論じます

現代社会では…

- 市場社会
 - 私的労働という労働様式が商品生産関係という生産関係を形成し、
- 資本主義社会
 - 賃労働という労働様式が資本賃労働関係という生産関係を形成する。

```

                    graph TD
                        A[私的労働] --> B[商品生産関係]
                        C[賃労働] --> D[資本賃労働関係]
                    
```

先取り：後で論じます

生産関係と所有関係

◎生産関係と所有関係・分配関係との関係については、政治経済学2で考察する。

- ▶結論だけ言っておくと、労働が所有を規定し、生産関係が所有関係を規定する。

生産手段と消費手段

- 富（＝社会的総生産物）の二つの区分
 - 生産手段
 - ▶ 消費手段を手に入れるための手段
 - 消費手段
 - ▶ 経済活動の最終目的

生産手段	ハサミ 綿布
消費手段	シャツ

サープラス

- =一日の生活に必要な消費手段、および、
 そのために今日使われた生産手段
 を越える部分
- 生産の拡大に使うことができる。
 - コスト削減すればするほど、
 増やすことができる。

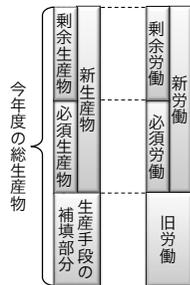
例

サープラスの例

- 江戸時代の農村においては、年貢
- 現代資本主義社会においては、
 資本主義的営利企業の利潤（営業余剰）
 - 利潤から派生する。
 - 配当
 - 企業が支払う地代
 - 企業が支払う利子

剰余生産物と剰余労働

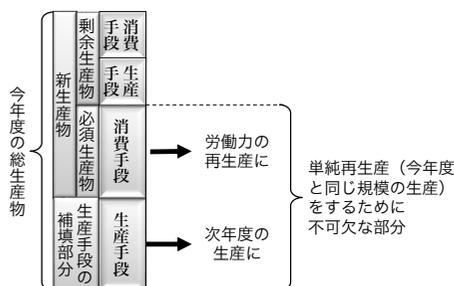
1. 必須生産物と剰余生産物
 - 新生産物の二つの区分
 - 必須生産物の消費によって社会の労働力が再生産される
2. 必須労働と剰余労働
 - 新労働の二つの区分



社会の年間再生産

- 一年間の社会の総生産物
 = 今年度中に使われた分を補填する分の
生産手段
 + 社会の構成メンバーが生活するための
消費手段
 + 余りの部分（サープラス）

年間総生産物の構成部分



今回のまとめ

- ❖ 動物は本能的な集団形成
 人間は労働を通じて自覚的な社会形成
- ❖ 生産関係は最も基本的な社会関係
- ❖ 社会的分業は労働の変換のシステム